

【震災募金口座】 振替 00140-9-180881
宗教学者日本バプテスト連盟総務部

「共に生きること」

濱野道雄（原発課題担当、鳥栖キリスト教会員、西南学院大学神学部教授）

「自分の街の脱原発に取り組んでもらうことが、福島への支援になる」。福島にある教会の方の声です。「可哀想な福島の人々を助ける」という支援ではなく、共に生きることとしての支援ならば、今福島の人々が自分たちと同じように暮らせるための必要をサポートしながら、自分の街でも同じく安心して生きてゆけるように声をあげることは、とてもフェアで、自然で、筋が通ったことだと思います。日本では、例外なくいつでも自分の街で同じような事故が起こりうるからです。逆に言えば、自分の街で脱原発への思いや行いがなければ、「可哀想な福島」への支援を日本バプテスト連盟としても続けることになるのかもしれませんが。

関西電力、大飯原発3、4号機運転を差し止めとした福井地裁判決が、この7月、名古屋高裁で破棄されました。新しく安全を示すデータが出てきた訳でもなく、「新規制基準に従っている」とだけの理由でした。福井地裁の裁判長であった樋口英明氏は「過去10年間に4カ所の原発所在地で、原発の耐震設計の根幹となる基準地震動（想定する最大の揺れ）を超える地震が5回も発生したことを知った時」¹再稼働を認めぬ方向に心証が傾いたと語ります。実際、新規制基準に従っている現在の原発の耐震基準値を超える地震は何回も日本で起こっており、大飯原発より私の実家の耐震基準値の方が高いです。

福井地裁の判決文では「極めて多数の人の生存そのものに関わる権利と電気代の高い低いの問題等とを並べて論じるような議論に加わったり、その議論の可否を判断すること自体、法的には許されないことであると考えている。…たとえ本件原発の運転停止によって多額の貿易赤字が出るとしても…豊かな国土とそこに国民が根を下ろして生活していることが国富であり、これを取り戻すことができなくなるこ

が国富の喪失である」と述べられていました。

キリスト者としては、イエスが明示した出エジプトの解放の神ではなく、財力（マタイ6・24）を神とするのは誤りと言えます。そして軍事力（マタイ26：52）を神とすることも、自民族を神とすること＝ナショナリズム（ガラテヤ2・11～16）も同じです。また他者の財力、軍事力、ナショナリズム等を恐れる恐れ自体も、神としてはならないのでしょうか。今年度、私はパレスチナ・イスラエルで生活しており、鳥栖教会牧師の野中宏樹氏に担当を代理していただいています。イスラエルには現在300程の核爆弾があると言われてますが、イランの原子炉関連施設でもまた核爆弾が製造されうると恐れ、批判し続けてきました。そこでイランは諸国と核合意を結び、核開発を凍結しました。しかしアメリカはイスラエルの要請を受けイラン核合意を破棄し、この8月、経済制裁を開始しました。イラン国内ではデモが起こり、イスラエルとの緊張がかえって高まっています。

原子力は、少なくとも今の人類の段階では、人間とその社会には管理できない圧倒的な力です。それはすぐに圧倒的な財力、軍事力を生み出し、それらは圧倒的なナショナリズムや恐れを引き起こします。神ならざるものを神に、安易にしてしまいます。そこでは共に、同じいのちとして生きる世界が破壊されていきます。

そうではなく、共に生きること。自分の街で、福島の人々と共に生きられる世界を祈り求めること。そのための支援を、これからも共に続けさせてください。多くのお祈り、お支えに感謝しつつ。

1 朝日新聞デジタル版、2018年8月4日

2018年度震災募金報告（4月～7月） 累計：98万円（目標600万円）

これからもご支援をお願いいたします。

2018年4月～年7月 募金者 31名・件（受付順、敬称略） 諫早、百合丘、中野、筑紫野二日市、八王子めじろ台、奈良、調布、平尾、久保祐子、飯塚、田中基子、若松 東北復興支援コンサート出演者一同、八代、道後、シオンの丘、日立、丸亀城東町、南九州連合 小羊会、太田、調布、学）西南学院中学・高等学校、仙台圏バプテスト伝道協議会 賛美集会献金、福岡、大分、調布、久保祐子、古賀、恵、調布、福岡、日立

「福島で生きる 福島を生きる」 大島博幸（福島主のあしあとキリスト教会・牧師）

表題の言葉は、JR福島駅西口の改札を出て、下り階段の正面にある太陽光発電会社の広告です。福島市民になって2ヶ月が過ぎました。種々の用事で首都圏に行き、新幹線で福島に帰ってきてこの階段を降りる度に、自分自身への指針や思いを新たにさせてくれます。

さて福島市民になって2ヶ月ですが、「福島主のあしあとキリスト教会」に牧師として招かれて3ヶ月になりました。この間教会の皆さまと、礼拝や祈祷会はもとより、東北連合の集まりや様々な教会行事をご一緒し、祈り祈られ、支え支えられ、み言葉の力強さなど、信仰による交わりの現実に触れてきました。その中でいつも語られ、覚えられていることは、全国の教会・伝道所の皆さまの祈りや支え、そしてイエスさまが生きて導いてくださる感謝です。「主に感謝します！」と毎週の礼拝で、大人も子どもも礼拝出席者全員でこの言葉が交わられています。また週報報告欄の最後には、「教会の転居先が与えられるように祈りましょう。」と書かれ、祈祷会だけでなく、各自の祈りの中でも熱く祈られています。現在の教会の課題は、その祈りを具体的に進めることです。

初めて東北地方に住み、色々なことに驚いたり感動したりしています。新幹線停車駅から、車で1時間程行くと標高1,700mの吾妻山に到着、清流度日本一の「荒川」が徒歩5分のところにあり、10分圏内の市の郊外にはたわわに実を付ける「サクランボ」、「モモ」、「リンゴ」などの果樹園が広がり、そして充実した温泉。こうした豊かな自然は、恵みと同時に厳しい自然環境ももたらします。盆地の福島市は、夏は暑く冬は寒いと言います。今夏、その暑さを体験しています。まだ冬の寒さは体験していませんが、その寒さにもわくわくしています。自然は、この地域の人々に「福島で生きる」知恵や文化を

培ってきました。

7年前の東日本大地震による「原発事故」は、この地に新しい過酷な環境をもたらしました。私は全国紙をとっていますが、その中の福島版には毎日、天気情報と同様に「県内の放射線量」が掲載されています。また週に一回、「原発週報」の記事があり、NHKラジオでは正午前と午後7時前には毎日、「県内の放射線量」が伝えられます。公園や学校、幼稚園、公共施設や教会・お寺などの宗教施設にモニタリングポストが設置され、空間線量が表示されています。近所のお宅の庭には、ここそこに汚染土を収納したフレコンバッグを覆うブルーシートがかけられています。この地で「原発事故」が、今も現実に現在進行形なのだ知られます。具体的には、避難の方々の帰還や通行規制の解除に伴う被爆、いくつもの原発裁判、小児甲状腺ガンなどの健康被害、数値を計って安全が証明されても信じてもらえない風評被害など、どれも大きな課題です。教会の課題と共に、改めて「福島を生きる」課題がたくさんあることを知らされます。

福島県には連盟の教会が3つあります。「あゆみの家キリスト教会」、「郡山コスモス通りキリスト教会」、「福島主のあしあとキリスト教会」です。これからもぜひ祈りに覚え、支え・励ましていただければと思います。

（写真は、子ども避難保養プロジェクトによるキャンプ集合写真）

